

VOLUME

70

J A N
2 0 0 0



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-KEN 422-8526 JAPAN

inside NEWS



バルカンの空に 陽が昇る

静岡県立大学
国際関係学部3年

森田太郎



攻撃の跡のあるモスタルの町 / ボスニア・ヘルツェゴヴィナ
*表紙はサラエヴォ市中心部

本学国際関係学部国際関係学科3年生の森田太郎さんが、第1回「秋野豊賞」を受賞した。本賞は、国連タジキスタン監視団の政務官として活動中に、凶弾に倒れた故秋野筑波大学助教授の事件をきっかけに設立された、秋野豊ユーラシア基金により設けられたもの。秋野豊賞はユーラシア大陸の紛争現場に根ざした研究、調査、ないしNGOなどで国際貢献をしようとする熱意ある若者への旅費、およびそれに伴う調査費・研究費の助成を行うものである。第1回の受賞者は3名。森田さんは、子供達のサッカーを通じたボスニアの民族融和について研究計画を提出し受賞した。今後計画に基づき現地での活動が行なわれる予定。今回の受賞を機会に森田さんに寄稿してもらった。

「自分の眼で見たものを、真実として捉える。」この言葉にどれだけの重みがあり、価値があるか、私はそれを追い求めつづけることになるであろう。私が目指す、民族融和、そして二度と民族紛争を起こさないために。

今年の春、私はボスニア・ヘルツェゴヴィナのサラエヴォにいた。そこで私は戦争というものが私の思考をはるかに超えた存在であり、民族紛争というものが残す傷痕の大きさを知った。サラエヴォ

の街を歩けば、無数の銃弾を浴びた高層アパート、迫撃砲でボロボロになった家屋、そして地雷敷設を示す「MINEテープ」。私の想像を超えた光景だった。このすべては、建物、街を狙ったものではなく、人の命を狙ったものなのである。その事実を目の前にして私はただ立ち尽くすだけだった。この銃弾の痕と同じぐらいの傷が、ここに暮らし、戦争をくぐり抜けてきた人の心に深く刻み込まれているのだと考えると、「民族融和」とい

うものを志し、やってきた私はあまりに無力であるように感じた。それゆえに、私はサラエヴォでの数日間、共に働く現地のNGOの人々と紛争のことについて何も語るができなかった。

日本では友人や、家族と共に紛争について自分の意見を語っていたが、そのすべてが否定された思いを感じた。戦争というものは本当にすさまじく、信じがたいものである。ポロポロにしたのが人間であるという事実、これは戦争を経験したことのない私には本当に理解できないことなのである。

私はこのような思いを抱きながらNGOの活動に従事していた。主に、私はここを訪れる子供達、またはサラエヴォの学校を訪問して日本語、日本文化の紹介を行っていた。子供好きの私には最適の仕事だった。彼らと話をしながら日本文化、日本語を教えながら、彼らの文化を教わる。旧ユーゴスラヴィアという国を研究の対象としていた私にとって最高の環境だった。

しかし、私がかつとも幸せだったのは、夕方彼らと共にサッカーをすることだった。彼らは私の授業中、つまらなくなると文句を言ったり、教室を走り回ったりするが、サッカーの時だけは楽しそうに、最高の表情をしながらボールを追った。暗くなって、もうボールが見えなくなっても、彼らは「あともう1試合やろう。」と言い、帰ろうとはしなかった。私も彼ら同様に次の日の朝までサッカーしたいと思っていたので、常にNGOの職員の人に「いい加減終わりなさい」といわれるまでボールを蹴っていた。

こんな日々を過ごしていた私にあるひとつの決意が生まれるのは、淡い陽が雲の切れ間から射し込むある昼のことであった。私はその前日、自分がホームステイをしているセルビア人のスタッフの家でのパーティーで、クロアチア人のスタッフや、セルビア人スタッフの家族、友人

と共に酒を酌み交わしていた。共に「民族融和」を目指すクロアチア人とセルビア人の彼らは楽しそうに語り合い、私を酔いつぶすことに躍起になっていた。私は最高に楽しかった。紛争後、激しく対立し合っているクロアチア人とセルビア人の私の友人達は共に心を通わせた友人として笑顔を振り撒いているのだ。私はフラフラに酔いながらもその光景の輝きを心で感じた。

そして迎えた明るる日、私が二日酔いで倒れているとNGOのオフィスに二人の少年がやってきた。昨日共に語り合った友人(NGOスタッフ)が私に「この二人がサイクリングに行きたいといっている。ミーシャ(私は現地でミハイルと呼ばれていた。ミーシャはその愛称である)大丈夫なら連れて行ってくれないか。」と頼んだ。私は当然引き受けた。

彼ら二人はVrelo Bosniという所へ行きたいといっているので私は二人に案内されながらついて行くことにした。そこへと向かう道で、私はポロポロに崩された家々を見つめていた。すると一人が私に「セルビア人がやったんだ。」と言ってきた。私が「僕はセルビア人と一緒に暮らしているよ。」と言うと、彼は「ゴメン」と言った。

紛争中おそらく何も分からない程幼かっただろう彼が「セルビア人がやったんだ。」と語ったことに私は深い悲しみを抱き、民族紛争が残す大きな傷痕を知る事となった。私が決意したのはその時だった。それはちょうどVrelo Bosniに到着し



森田さんの日本語・日本文化の紹介 / サラエヴォ市内の学校

た時だった。

サラエヴォを囲む山々から流れ出す美しき湧き水の集まった泉が、静寂に包まれた森に広がるその姿は実に美しかった。淡い木洩れ日が泉に反射しきらきらと輝き、彼らの顔を照らしていた。

私は、彼らの心に憎悪に包まれた民族意識が芽生えることだけは避けたい、子供達にはセルビア人を、クロアチア人を、ムスリム人を憎んで欲しくない。大人達の抱く民族意識をなくすことは難しい。しかし、子供達なら。私は未来のボスニア、そして旧ユーゴを築き上げる子供達には紛争前のように、支え合い、友人として暮らしつづけてきた3民族のように暮らして行って欲しいと願った。紛争によって受けた傷はすさまじく大きなものである。だが、互いを友人として、支え合う仲間として見つめ合わなければ何も始まらない。そう私は確信した。

そして、この強い意志を持って描き出したのが「秋野豊ユーラシア基金」で認められた私の計画である。この計画の内容についてはここで記すことにはしない(知りたい方は、直接私と話すか、または秋野豊ユーラシア基金のホームページを参照して頂きたい)。

民族紛争においてその紛争自体を終わらせる、停戦させることは確かに最も重要なことと言える。しかし、私は紛争終結後こそ、国際社会が果たさなければならないことの重要性は大きいと考える。人々の心には紛争中に芽生え、増大した民族意識というものがある。その民族意識というものには、多くの「真実」が存在する。しかし、私には紛争中に起きたことは何も目にしていない。それゆえに彼らの言う「真実」を私は正しい、正しくないと判断することはできない。私は活動中に訪れたある小学校で英語の教員に「紛争のことであなたは何を知っている。」と聞かれた。そのときの彼女の鋭い視線に私は「何も知りません」としか言えなかった。その後に出た彼女の一言はいまだ鮮明に私の耳に残っている。“I know the truth.”

秋野豊先生の言葉「自分の見たものを真実として捉える。」「脅かされず踊らされず踊る」、私はそ

の言葉を受け止め、忠実に守りたいと言う意志を持っている。それゆえに、今サラエヴォで起きていることを自分の目で見つめて行こうと考える。そして、秋野豊賞受賞と言う最高の名誉、そして最高の機会を無にすることなく、私自身が考え出した「民族融和」に向けた挑戦を現実のものとなるよう努力しようとする。

私が、生涯の先生と心に誓い、常にその眼差しを向けていた秋野豊先生はもうこの世にはいない。しかし、彼の意志は多くの人々の心に生き続けていることでしょう。私もその一人として、彼の背中を追いつつ、「民族融和」という課題に立ち向かう中で彼と出会えればと思っている。Last Samurai (生前、秋野先生はタジキスタンでそう呼ばれていたという)のLastは私達によって消されることを期待し、私はバルカンの空に陽が昇るのを見つめてゆく。




破壊されたビル / サラエヴォ市内

経営情報学部動き

経営情報学部長 宮下 淳

1. 学部の取り組み

経営情報学部では、“チャレンジ”を合い言葉にいろいろなことに積極的に取り組んでいる。コンピュータやネットワークを駆使する先端志向はもちろんだが、学部のあり方についても試行錯誤や改革を果敢に行っている。

最近の動きでは次の3つが大きな取り組みといえるだろう。

1) 学部自己評価とインターネット発信

大学・学部は、向学心に満ちた学生にたいして、一流の専門家である教員によって教育が行われる。だが、現実には大学は「大衆化」に埋もれ、緊張はキャンパスで失われてしまっているといわれる。

そのような中で経営情報学部は「自己の姿」を見なおし、厳しく自己に対峙する。未来志向から高らかにビジョンを構想する。1997年に自己評価を終え、その結果を広くインターネットで発信し、多くの方からのご意見、ご批判などを受けるようにした。(<http://ai.u-shizuoka-ken.ac.jp/jikohyoka/>)

2) 学部倫理要綱

大学の教員には学問の自由のもとに、研究・教育の自由が保証されている。その言動も一般の会社員とは異なり、かなり自由であるといえよう。それは高い品性と志を前提にしたものである。

だが、最近になって我が国の大学教員の不祥事がマスコミでしばしば報道されされるようになった。一部の大学教員の人格、倫理が荒廃しているのである。こんなことでは学生に責任ある教育ができない。ましてや、本学部の教員は県立大学の教育公務員である。そのようなことから、学部で

は、教員の倫理の保持と一層の高潔な品性を目指すべく倫理要綱を策定した。

3) カリキュラム改革

経営情報学部は新しい時代に適した学部として1987年に発足した。経営・数理・情報の融合を目指し、学部の特色も出せるようになった。その間、幾度かカリキュラムの改革を行ってきたのだが、現在、大幅なカリキュラムの見直し作業中である。

総合的な検討はすでに終えており、改革基本計画の策定、実施計画に移る。まだ検討の余地が残されている事項があるものの、その主な項目は次のとおりである。

基礎ゼミの導入 卒論の選択必修制への移行
選択必修科目の見直し 経情総合科目の充実
GPA(Grade Point Average)制 3年後期の必修課目指定

2. 教員と学生の活動

経営情報学部では大いに学び、大いに遊ぶをモットーとする。学生は本分である勉学に真剣に取り組む、部活動やサークル活動では青春を謳歌している。学部はこれまでに10回の卒業生を出したが、なかにはユニークな先輩がおり、卒業後に金融機関に就職したが退職して中国(上海)に留学、今秋、現地での企業に就職が内定したNさん、コンサルタント・プロデューサー会社を起業したS君、税理士になって東京で活躍中のSさん、スーパーに就職したが国税局のGメンに転職したI君、このほかにも総合商社や新聞社で活躍している卒業生もいる。

一方、教員にもユニークな人が多く、また、幅広く多様な専門分野でそれぞれ意欲的に研究・教育に励んでいる。教育活動にも熱心で、ゼミ合宿

や学部ボーリング大会では教員と学生が親睦を深めている。

最近、やや学生気質が均質化して「おとなしくなった」感もあるが、それぞれが「自己発見」の試行錯誤をしていることはたしかだ。教員はそれを何とか支援しようと努めている。

3. 学部のお話

学部の活動の特徴としては、次のようなことがあげられよう。

- ・学部報「チャレンジ」の発行(年数回)。
- ・学生による授業評価(4年生の卒業時にアンケート)。

・学生の活躍

東日本ボーリング大会で優勝
(学部4年生片井文乃さん)。

卒業研究での防災システム研究や環境問題の研究、地域情報草薙ネット等が新聞・TV等で紹介された。

- ・教員の社会活動(貢献)...各種プロジェクト、委員会・審議会で委員長等。
- ・学部で優秀卒業論文を表彰。
- ・学部教員のE-mail(メーリングリスト)利用による相互連絡や情報・意見を交換。
- ・教育科目の内容についての教員同士による発表・検討会の実施。
- ・学部学生全員がメールアドレスを保有し、連絡などに利用。

経営情報学研究科の動き 現状と展望

経営情報学研究科長 青山 英男

早いもので、研究科設置から2年が経過した。学部(経営情報学部)が目指す「経営・数理・情報」の統合、という基本理念をより高度に実現すること、公立の大学院らしく、地域社会に一層の貢献をなすこと、を完成年次の目標に研究・教育スタッフ、事務局スタッフは可能な限りの努力を傾けて来た。

2,000年を目前にして、所期の目標がどの程度達せられたかを、与えられたこの機会に振り返って見たい。

まず、学部教育の成果を経営管理、財務会計、経営科学及び情報・数理・環境システムという四つの研究・教育の系に集約し、高度基礎教育の仕上げを実現する、という当研究科の基本理念につ

いては、各系の講義・演習とも院生の志望を十分に満たし得る組織的なカリキュラムの編成によって所期の目的が実現しつつある。特に、各系とも、研究方法論の、十分な時間を掛けた指導、実践との接点を意識した事例研究等をバランス良く担当講座にとり入れ、しかも専門語学力を常にレベルアップすることを研究科共通の指導方針とすることで、学部で身につけた経営・情報の広範囲な常識的知識を専門の域にまで高められる具体的な方向を提示し得たと思っている。

地域社会への役立ちについては、後で触れる社会人院生受入れの新制度設置の他に、静岡県内の企業、公的組織等との共同研究、受託研究(調査)等を通じ、研究科研究・教育スタッフの豊富な専門能力、知識の提供、活用に成果を上げつつある。こうした取組みは、今後、広く県内外に産学共同

研究の対象を求めると共に、院生の実務研修の場としても有効に活用することも可能であり、むしろ産業界等からの受入窓口、事務局を常設すること等を通じ、当研究科の特色の一つとして積極的に促進していきたい。

更に、地域貢献の当初からの方策に、経営情報学研究科の主催にふさわしいエクステンション・プランの実現がある。予算の厳しさ、当大学院専任研究者を優先的に充てるべき、との批判等によって、実現は完成年次以降にずれ込むが、ようやくテストプランの人事(担当者)も決まり、成果のあるエクステンションのスタートが期待されている。

*

設置認可から2年の間に実現したいいくつかの改革、制度の設置についてもこの場で簡単に触れておこう。

研究科の専任スタッフについては、認可時から絶対数の不足が解消されないで来た。遠方から非常勤の方々にもご協力を頂いているが、学部の希望する若手教官の研究科参加を先生方全てについて可能にすべく、慎重に業績審査を行い、11月の大学評議会において人事異動(大学院専任帰属)に伴う、カリキュラムの充実・改革が承認された。

優秀な院生を迎える仕組みも、社会人、外国人の特別試験制度(詳細、厳密な口頭試問による制度)、学部・大学院一貫教育を意図したゼミナール(教官)推薦制度(特別推薦生)更に、9月、翌年3月の二度に亘る入試制度など完成年次以降の更なる発展の為の必要な方策はほぼ意図した内容が整った。

最後に今後の経営情報学研究科について一言加える。

どうか「形」の整ったこの組織を、如何に存在感を鮮明にするかが将来に向かっての重要な課題であろう。方策は、無数に考えられる。例えば各系の内部での(技術)的特化(プロフェッショナルの養成)、領域を明確にした上での国際化、先に触れた常設の産学協同研究機構による県下成長企業との交流(研究科研究スタッフと業界指導者とのサロンの設置等)、ユニークなエクステンション・プランの実施による女性特に家庭婦人の教養プログラムの創設等々…。

*

数ヶ月後に修士第一号を送り出すことになるこの時期に、少なくとも予算を消費する当研究科が、設置以来有意義であったのか、更に意義を持ち続け得るのかをあらためて考えなければなるまい。



看護学部の動き

看護学部長 矢野正子

看護学部は、いま最上
学年は3年生です。平成
11年度も余すところ少
なくなりました。そこで、
いままでを振り返り、い
くつかの話題をレポート
したいと思います。

1. 3学年後期より、本格的な臨地実習がスタート

臨地実習とは、学内で学んだことを保健医療施設、社会福祉施設、保育園や家庭などの現場で、健康から疾病、リハビリテーションまで、または、生から死に至るまでのあらゆる対象者について、看護を実施し体験することで「理論と実践の統合」を図ろうとするものです。実習場所は、病院では県立総合病院、県立こども病院、市立島田市民病院、清水厚生病院の4ヶ所です。特別養護老人ホームでは、楽寿の園、小鹿園の2ヶ所、保育園では静岡市内の上下、安部口、城東、新富町、瀬名川、長沼、服織、服織第二、東豊田、八幡の10ヶ所、また、助産院は増田助産院(静岡市)、焼津第一助産院(焼津市)、城山助産院(富士宮市)の3ヶ所、そして訪問看護ステーション(Visiting Nursing Station、VNSと略します)は、静岡市済生会VNS小鹿、老人VNS静岡、老人VNS清水、老人VNS清水第2、VNS瀬名、VNSふれあい、VNS花の7ヶ所です。学生も教員も朝は8時30分から始まりますので、前日から体調を整えておかねばなりません。



臨地実習

臨地実習



2. 第19回日本看護科学学会学術集会を主催

去る12月3・4日、グランシップにおける看護学部主催の学会は、全国から約2,000人の参加を得て盛況裏に終わり、開催にこぎつける迄の1年間(実際には2年前から準備スタート)学部スタッフの苦勞が実を結びました。何しろ看護関係学会では最大規模、しかも昨年をかなり上回る一般演題の応募があり、16会場というほとんどの部屋を使うという状況でした。メインテーマは「看護・今世紀の大いなる遺産と次なる提言」「Outstanding Achievements of Nursing in this Century and Proposals for the Next」で、その主旨は、ミレニウムという境目の年をはさんで、今世紀については、看護職が今までやってきたことをそれぞれの立場で振り返る、次世紀に付いては、ジャンルを越えた看護への自由な発言を、というものでした。看護系大学が急増している中で、看護学の発展や将来像の検討が課せられている折、そのための前進の機会を与えることになったのではないかと思います。学部の3年生2年生が教員と一緒に、そろってみかん色のジャンパーを着て活躍し、参加者から上々の評を得ることができました。



3. 学外研修は

エーザイ川島工園(1年生、8月31日)と
河口湖フィールドセンター、
山梨赤十字病院(3年生、9月28日)

1年生には、我が国の製薬産業の歴史と最新の製薬工程を見学研修することで、今後の学習の視野を広げることを目的としました。日本で唯一の薬の博物館の見学や、工園長の説明など、もっとゆっくり見たかったとの感想もありました。3年生は、人間を環境という視点から5感を使っての自然観察を行い、また患者さんのアメニティや自然との調和を考慮して建築された医療施設を見学研修しました。また、医療施設と地域との連携の実際について担当者を交えて学びました。

以上、看護学部の動きのいくつかを紹介しましたが、学部にとって今年度は思い出深い年になりそうです。

臨地実習



学外研修
～河口湖フィールドセンター～

谷田一帯で歌われた駿河長持唄

昔から、県立大学のある谷田一帯では、嫁入りの唄として、『長持ち唄』が歌われていた。最近では、ほとんど聞かれなくなったが、県立大ができた昭和62年頃には、まだ記憶している人がいて、『つい昭和40年ごろまでは、歌っていた』と話していた。

ハアー親父ナー いきますヨ ヤレヤレ！
おふくる様ヨー 行けば繁盛でヨ
暮らしますナーエー ヨイショ！

(贈り唄)

ハアーめでたなナー めでたのヨ ヤレヤレ！
この長持ちを、渡しますぞえヨ
先様ヘナーエ

(返し唄)

ハア - 長のナー 道中ヨ ヤレヤレ！
おおきにご苦労 まさに受け取るぞエ
この肩ヘナーエ

谷田風土記

この歌に、嫁入り道具を入れた『長持ち』を運ぶときに歌ったものが結婚式の祝い唄となったのである。長持ちを担いで出発するとき、それを婿がわに渡すとき、受け取る時と、それぞれに分れている。つい最近まで、谷田一帯で歌われていたとは、嬉しいことではないか。

(なお、希望者には、この録音テープを差し上げます。)

国際関係学部教授 高木桂蔵



62

中国浙江大学 汪斌所長来学

本学と学術交流協定を結んでいる中国浙江大学の東亜経済研究所 所長 汪斌氏が11月16日来学し、経済講演会を行った。

「中国の経済の現状と発展動向」と題し、建国50周年を迎えた中国の経済の現状と今後の展望について、経済の専門家の立場で講演が行なわれた。国際関係学部の学生約50人を前に日本語で行なわれた講演では、現地で見えた中国経済の現在の状況、その変化の内容、今後の発展の方向、中国経済がアジア経済全体に与える影響など興味深いテーマが取り上げられた。実例を交えた豊富な講演



内容に時間が足りなくなるほどだった。

汪斌所長は、平成7年度に国際交流事業による協定校からの派遣教員として本学に半年間滞在した経験がある。平成7年度滞在中は経営情報学部において、大坪 壇本学名誉教授と共同研究を実施した。

受賞

世界子孫代理人会（WARD）よりの感謝状

世界子孫代理人会(World Association of Representatives for Descendants)の第8回総会において、本学環境科学研究所、環境工学研究室の岩堀恵祐助教授に感謝状が送られた。

WARDは、未来の人類のために活躍している団体と個人に、感謝状を送っている。岩堀助教授は、環境教育は体験が大切と説き、児童の環境に係わる体験学習の指導や社会人の環境学習サポーター養成に注力し、環境の保全に協力している。また環境に係わる体験学習の一環として巴川の浄化活動をしている静岡市立千代田東小学校の児童、教諭へも同時に感謝状が送られたが、岩堀助教授はこの活動の指導も行っている。

第8回総会では他に、Hubert Clrien元フランス国立宇宙研究センター所長、板橋区立エコポリスセンター等に感謝状が送られた。

はばたき 寄金 からの お知らせ

はばたき寄金では、次の団体・個人に事業助成金・奨学支援金を交付しました。



関さんへの奨学金交付

区分	事業助成	奨学支援
交付対象者	第4回日中健康科学シンポジウム訪中団（学長ほか10教員）	関里葉矢さん（国際関係学研究科M2）
交付日	10月22日	12月15日
交付金額	16万円	5万円
備考	10月下旬中国浙江省医学科学院で開催された第4回日中健康科学シンポジウムの同行通訳の雇い上げ経費等に充当	短期交換学生としてモスクワ国立国際関係大学へ4月から6ヶ月間派遣

はばたき寄金



12月末現在寄金高

4,074,178円

前回以降の寄付金

428,000円

学内19件 228,000円

学外1件 200,000円

短期交換留学生研究発表会の開催

本学との交流協定校であるモスクワ国立国際関係大学からの本年度交換留学生、セルゲイ・タルノフスキーさんによる研究発表会が、平成11年12月15日に開催された。「ロシアと日本の領土問題」と題し、国際問題の分析の手法を学ぶケーススタディとして、領土問題についての研究発表が行なわれた。セルゲイさんは、国際政治を専攻し、国際システム論をテーマに勉強しており、専門の国際政治だけでなく、ロシア国内、旧ソ連地域内のことにも精通している。ロシアの専門家の目でみた北方領土問題についての分析を、日本語で行い、配布資料も日本語で作成した。研究発表では、1991年のゴルバチ

ョフ大統領と海部首相との首脳会談から、1998年のエリツィン大統領と橋本首相との首脳会談までの内容を、両国の交渉内容に対する重要度の判断の差、中長期的な交渉目的の違い等の観点から分析し、両国が交渉で譲歩できる点、妥協できない点などを解説した。



「国際交流談話室」開所式

平成11年11月1日剣祭の最終日に、「国際交流談話室」開所式が行なわれた。国際交流談話室は、本学学生ホール2階の会議室を整備したものだ。談話室は留学生間の情報交換・懇談の場、留学生と日本人学生の交流の場とすることを目的として設けられた。談話室には、内線電話、机6台、椅子20脚、ホワイトボード、応接セット、テレビ等が整備されている。

開所式(オープニングセレモニー)には、廣部学長、中山国際交流委員会委員長、多々良局長、木村学生部長他本学関係者と留学生約30人が出席し、学長、留学生代表挨拶の後、学長により

談話室の看板が掲げられた。開所式後、談話室において交流会が行なわれた。国際交流談話室では、留学生、日本人学生による自主的な交流会、語学勉強会などが企画されており、今後多いに利用が期待されている。



待望の 細胞機能解析 システムの設置



祐田 泰延

薬学研究科製薬学科専攻 教授

わが国は、世界に例を見ない程の速さで人口の高齢化が進み、21世紀における老人保健や生活習慣病に対する対策が急務となっている。こうした疾病の発症機構を解明並びにその治療法の開発が希求の課題であり、発症機構をより正確に把握するには分子および細胞レベルで検証する必要がある。近年、これらの研究および研究技術は長足に進歩してきている。

当薬学研究科において、薬物送達およびその機構（リポソームの細胞への接着、エンドサイトーシスなど）に関する研究、細胞機能解析に関する研究の重要性が論じられ長年に亘る検討の末、やっと本細胞機能解析システムが大学院先端設備として申請され購入許可されたものである。本システムは、カールツァイス社製の共焦点LSM 510レーザー स्क্যান顕微鏡を主体としたシステムで、薬学研究科のみならず生活健康科学研究科等の利用者が多く、連日予約が満員の状態である。

本システムの特徴は最新の共焦点LSM 510レーザー स्क্যান顕微鏡を主体とした高度な画像処理機能を持つもので、種々な細胞機能を画像解析によってオルガネラ相互間の情報伝達経路および作用点あるいは部位を視覚的に把握しようとするものである。本システムの優れている点を以下に示すことにする。

- 1)画素子が他の機種に比し4倍多いので解像度が世界で最も優れている。
- 2)高速スキャンが可能で他の機種は不可能である。
- 3)コンフォーカル調整は自動であるが、他の機種は手動である。
- 4)自動明るさ調整可能、他の機種は不可能である。
- 5)Z軸セクショニング厚さ調整可能、他の機種は不可能である。
- 6)光学系が世界で最も優れ、信頼性が高い。

BASS 3000等の特徴を組み合わせることによって、より高度な組織細胞機能解析が可能になった。

疾病並びに老化機構の解明あるいは遺伝病の検索並びにその解明等は、従来の研究方法に加え、1)オルガネラのどの部位に発現しているか、2)各オルガネラとの協働など、3)開発した薬物がターゲットの部位に正確に働いているか等など、4)これらの研究に必要な検出試薬の開発などにおいて3次元的に視覚的に把握する必要がある。本システムはこうした細胞機能解析に必須のツールであり、それらの研究を目指す研究者にとって待望の魅力ある機種である。

設置場所は薬学部3階共同利用機器室(6318室)であり、上述のように連日盛況で、既に本システムを用いた優れた研究成果も発表され、将来も多数のユニークな研究成果が出るものと期待されている。



ユニバーシティプラザでの模擬店

第13回剣祭が、10月30日から11月1日の3日間開催された。今回のテーマは「最近わたしたち 県大期 なのよね。」

剣祭はキャンパス近くにある草薙神社に奉納されている「草薙の剣」に由来してつけられた名称。

今年度は13回目を迎え、10月30日のオープニングセレモニーから、県大ウルトラチャレンジクイズ、スピーチコンテスト、フリーマーケットのほか、各学部棟では文化系クラブを中心とした活動状況の掲示・発表やユニバーシティプラザにおける出店、研究室における教室開放等が行なわれた。

参加団体は、各クラブ・サークル、有志団体、フリーマーケットには地域一般団体も加わって開催された。

また10月30日には、静岡県、県経済連、県山葵組合連合会主催のフルーツライフフェスティバルが剣祭と同時に開催された。みかんとわさびを題材に楽しみながら、見る・食べる・学ぶを基本とする体験型の催しで、多数の来場者があった。



学生スピーチコンテスト



軽音楽部

第 剣祭



フリーマーケット



美食倶楽部



研究室公開



国際学友会



ミュージックサロン

13回
開催

